11月8日「いい歯の日」 医科歯科連携にむけて

きょう11月8日は「いい歯の日」。歯の健康について考え、いい歯を保とうと、日本歯科医師会が制定した。近年、歯が身体全体に及ぼす影響が問題になっている。歯を治療したら、長年悩まされていた肩こりやひざ痛が消えた、寝たきりの人が起き上がったなどという例は意外と少なくない。そこで、クローズアップされているのが、内科医や外科医と歯科医師が協力して治療に当たる〝医科歯科連携〟。この治療を積極的に進めている内科医の中垣美紀子・茨木市立豊川診療所所長と歯科医の藤井佳朗・新神戸歯科院長に、現状や問題点を話し合ってもらった。

医科・歯科の交流改善を

対談
新神戸歯科
院長 藤井 佳朗
茨木市立豊川診療所
所長 中垣 美紀子

◆略歴／〈なかがき・みきこ〉
平成３年関西医科大学第２内科入局。大阪府茨木市済生会病院勤務を経て９年から茨木市立豊川診療所長。日本内科学会内科認定医、日本東洋医学会専門医、日本循環器学会会員、日本精神神経学会会員。

藤井　いい歯というのは単に虫歯がないとか、歯並びがいいとかではなく、口の機能が正常な状態にあるということです。口には食事をしたり、発声するなどのほかに身体を支えたり、あごや頭の位置を決めたり、姿勢を整える機能があります。「いい歯の日」を、そういうことをみんなで考える機会にしてもらえるといいですね。

口の機能が原因で身体に起きる症状は意外に多い。今日受診に来られた方は介護職の女性でしたが「ひざが悪い」と申し出られた。そこで歯のかみ合わせを修正したら、ひざの痛みが治まった。かみ合わせが悪いことが原因で身体に変調をきたすケースはいっぱいある。そういうことは最近わりと知られてきていますが、まさか自分が…と思っている人が多い。

中垣　私のところへ受診に来られる患者さんにも歯に問題がある方が、結構おられます。歯を治したら今まで効かなかったお薬が効くようになったり、咬合がうまくいっていないと薬が効きにくいこともあるみたいですね。

頭痛、肩こり、腰痛などは歯科治療ですぐ治ることがあります。視力、眼圧の改善、糖尿病、アトピー性皮膚炎、アレルギー症状、めまい、高血圧、狭心症などへの効果も経験しています。

中度から重度の歯周病患者は、脳卒中で2倍、慢性呼吸疾患で2～5倍、冠動脈疾患で2倍、糖尿病で2～4倍の発症リスクを持つと言われています。

藤井　だからこそ医科歯科連携が必要ですが、これがなかなか進まない。それは、今の西洋医学が細分化されすぎていることが原因として大きいと思います。

内科1つをとっても心療内科、呼吸器内科、消化器内科など、専門化されていますが、あまりに細分化されると身体全体のことがつかめない。対症療法で症状が消えてしまうと歯が遠因というのがわからないまま、良くなったように思って重症化してしまう。

頭痛、肩こり、腰痛など 歯科治療でなることがある ―中垣さん―

中垣　大学の教育にも問題があるように思います。医学部では歯科の授業はほとんどありません。だから歯科のことは考えずに診察しているのが実態ですね。歯科的な疾患ことを念頭に置いて治療がなされたら、助かる可能性がある病気もあるかもしれない。

私は歯が原因かなと思ったら、歯科の診療を勧めています。

藤井　米国では医学と歯科医師会と歯科医師会は別――と明確に分かれています。

中垣　多くの医師は歯は噛むだけのものという認識を持っているのではないでしょうか。私もそうだったのですが歯科的なアプローチで多くの人が救われていたことを知りました。それでも医科から歯科医の先生を紹介することはあまりありません。

藤井　病気になればまず専門医に診てもらうことが先決です。専門医が治療して、どうもうまくいかない時に歯科という選択肢が浮かぶかどうかだと思います。

中垣　歯周病菌の体内への侵入が動脈硬化や血栓性疾患、慢性的な感染症の原因になることがわかっていますし、歯科治療で使われるある種の金属が不定愁訴や慢性疾患の原因になることも明らかになってきています。

それらの病気で患者さんがいきなり歯科を受診されることはないでしょうが、医科の先生から指摘されることで選択肢が増えれば国民的利益は大です。

求められる、全身の知識持つ歯科医

藤井　歯科の重要性を医科に伝えようという歯科医はいるけれど、医科の方から歯科の情報を得たいというケースは少ない。

大体、総合病院に歯科がないのは問題です。1人の患者さんが来院されたら、それぞれ専門の先生が診て、どうやって治療するかを考える。その医師のグループの中に歯科医がいればいい。そういう歯科の重要性は歯科医の側から伝えていく必要があると思っています。

中垣　私は在宅医療にも携っていますが、義歯を入れたり、調整したりすると、脳にいい働きが起きて認知症や歩行困難が軽減されることがあります。病院に入院すると、放置すると身体の構造上問題が出てくることを知らないですね。

口は身体の機能に関係してるので 頭からつま先までの知識が必要 ―藤井さん―

藤井　歯がたくさん残っている高齢者は負担する医療費が2割ぐらい低くなるというデータもあります。若いころに歯をちゃんと治療しておけば、年を取ってから介護を受けなくても済む可能性は高い。介護が問題になっていますが、介護を受ける前に健康な身体をつくるよう心がけてほしいです。

それには歯を治すという手があるんです。首が悪くて手術するという人なかなかそういう機会が得られません。悪い歯をっていれば、早く治療しますね。病気の予防ためにも歯の意識が高まったらいいですね。

◆略歴／〈ふじい・よしろう〉
平成元年愛知学院大学大学院を修了後、同大学歯学部保存学第一講座入局。平成１２年、新神戸歯科開業。日本医用歯科機器学会理事、噛み合わせと全身との関連を考える会顧問。歯学博士。「咬合のマジック」（デンタルダイヤモンド社）「歯科からの逆襲」（現代書林）「歯科からの医療革命」（同）などの著書がある。

歯学を希望する学生が4年間一緒に学び、その後にメディカルスクールとデンタルスクールに分かれます。

日本は最初から分かれている。保険制度も異なる。卒業してから交流もない。

藤井　病気になればまの入れ歯を治したら手術せずに済んだ。椎間板ヘルニアの人の噛み合わせを治したら椎間板が引っ込んだという事例もあります。手術する、身体にメスを入れるというのは痛くて大変な負担ですので、メスを入れる前に歯の治療を検討するのもいいのではないでしょうか。

中垣　医科と歯科が連携を取り合っていけば、歯と内科的な疾患を抱えている患者さんたちが歯科を受診する機会が増えるということですね。

大阪大学に生体機能補完医学講座という講義があって私も出席させていただいています。そこは新しい取り組みに熱心な医科の先生の集まりで、歯のことにもとても興味を持っています。歯科からは医科の方にノックされていても、医科はそっちを見ないというのが現状ですが、その講座の先生方はノックに応えようとしています。そういう地道な活動を通じて医科の先生に、こんな治療もあるんだということを知ってもらいたい、と思います。

藤井　歯科医ももっと努力しないといけない。これからは努力する歯科医と努力しない歯科医に2極化されていくと思います。歯科医の数がコンビニより多いなどと言われていますが、淘汰されて廃業する歯科医が出ても、私は仕方ないことだと思う。

歯科医は歯のスペシャリストだけではいけません。歯は身体のいろんな機能に関係しているわけですから、頭のてっぺんから足の先まで知識のある歯科医でないといけません。私たち歯科医にもますます勉強が必要です。

医科歯科連携にエール

口腔関連症候群研究会事務局長・酒井秀俊氏

以前、家族がアトピーになり、いくつかの皮膚科で診察を受けたのですが、いっこうに改善をしませんでした。そんな時、藤井先生のことを学会で知り、歯の治療を受けたら、すぐ治った。それ以来、私も医科の患者さんの治療に関わるようになりました。

歯が原因で歩けなくなるとか手がしびれるという事例が実際にあるにもかかわらず、それを知っている先生は医科、歯科ともに少ない。医学部では歯のことは教えない。互いの領域の治療をするのに法律の制約もあります。医学の進歩に法律が追いついていない。歯科医の方から「歯が大事なんですよ」とアピールしていくしかないように思います。

◇あらいクリニック院長・新井恵子氏

医科の領域ではわからない病気があります。原因不明というのが。3年前に口腔関連疾患研究会のことを知り、参加するようになりました。そこで、かみ合わせや金属など、様々な要因が身体に影響を与えることを学びました。今、かなりの患者さんを歯科の方へ紹介しています。

医科の方では歯が原因の疾患があるなんて、まったくといっていいほど知られていません。医科の先生に対し、症状と原因の関係を系統立てて学術的に伝えていくことが必要だと思います。原因不明の病気に悩まされている患者さんのために。医科歯科連携で助かる患者さんは大勢おられます。

◇大嶋医院院長・大嶋和海氏

以前は総合病院で専門分野の患者だけを診ていたのですが、故郷の病院で内科や外科などいろんな患者さんを診るようになったら、原因のわからない病気がけっこうあることに気付きました。勉強してもわからない。そんな時、歯科の話を聞いて、歯の治療をしてもらったらクリアできた。まだそういう治療をやっておられる歯科の先生は少なく、歯科を意識している医科の先生はさらに少ない。早く医科が歯科の意見を聞けるような状態になればと思います。医科と歯科との間には、まだまだ垣根があります。お互いに交流して理解し合い、意見の交換ができるようにしたい。

参議院議員・石井一氏

〈企画・制作〉産経新聞社生活情報センター